

仏教の可能性を未来に開く

～戦後80年、「平和」創造に向けて～

2025（令和7）年、日本は戦後80年を迎えました。浄土真宗本願寺派には、戦前、無批判に国策に従い、仏教の名のもとで戦争を正当化し、積極的に加担した歴史があります。戦後、それへの反省から、「平和」に向けたさまざまな取り組みを行ってきたものです。また、世界でも戦争が起きぬよう、たゆまぬ努力がなされてきたものの、多くの戦争や紛争が起き、現実には「いのち」の尊厳をふみにじる事態が生じています。

このような国内外の情勢のなかで、誰もが心安らかに日々の生活を送ることのできる平和な世の中を未来に開いていくために、仏教・浄土真宗はどのような可能性を有しているのか。「自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現」という理念を掲げる私たちは、どのように現状に対峙し、「平和」のために何ができるのか。真の「平和」

に向けた道筋を考えるために、2025（令和7）年4月14日、本願寺聞法会館において「平和フォーラム」を開催いたしました。

「平和フォーラム」は、第1部と第2部の構成で行われました。第1部では、園城義孝総長より「戦後80年にあたっての平和を願うメッセージ」が発表られ、その後、釈徹宗先生（相愛学園学園長・武蔵野大学総長）、赤松徹真先生（本願寺史料研究所所長）、寺本知正総合研究所副所長による鼎談、第2部では、映画「ドキュメンタリー沖縄戦く知られざる悲しみの記憶」の上映が行われ、それぞれ、戦後80年を生きた私たちとして戦争と平和を考える機縁となりました。

今号では、「平和フォーラム」第1部・鼎談のうち前半の内容をまとめて報告いたします。

（浄土真宗本願寺派総合研究所）

はじめに

「平和」創造に向けて

○寺本 浄土真宗本願寺派では、戦後、平和への取り組みを種々行つてまいりましたが、そもそも、なぜ宗教教団は平和に対する取り組みを行うのでしょうか。平和への取り組みから、仏教や浄土真宗の教えは社会に何をもたらすことができるのでしょうか。

未来を創造するためには、現在がどういう状況なのかを捉える必要があります。また、現在を把握するためには、過去がどうであったのかを捉えていく必要があります。過去の取り組み、そして反省、これらを欠かすことはできません。

「平和フォーラム」第1部の鼎談では、釈徹宗先生、赤松徹真先生をお迎えし、それぞれのお立場から、宗教と社会の関係や、親鸞聖人のいのちの捉え方をあらためて見つめ直し、戦後80年の今、平和創造に向けて、仏教の可能性、浄土真宗

の可能性について考えていきたいと思ひます。

宗門では、『宗報』2025年3月号に「平和に関する論点整理」（戦後80年版）を公表しました。近代以降の宗教と国家の関係、そして戦争の歴史にさかのぼつて振り返り、戦後、教団は平和に関してどう取り組んできたかをまとめており、過去が学び直され、未来へと継承されていくことができるように作成されています。

こうした取り組みも踏まえ、今回の鼎談では、平和に関する話題を私たち3人で広げ、深めていければと思います。よろしく願ひいたします。

教団の歩みを振り返る

○寺本 平和を目指すために何ができるかを問うとき、宗教教団として「平和の取り組みをしない」という議論がある一方、宗教教団だからこそ「役割がある」という議論もあります。「宗教教団とは



何か」が問われてくる問題です。

一方、現実の教団を問うときに、これまでの歴史が問題となつてきます。教団として戦争に反対できなかったという事実があるからこそ、現実を問い、平和に向けて取り組むという議論があつてしかるべきかと思ひます。

戦後50年のときに設置された「戦後問題」検討委員会では、戦争責任と同時に、戦後責任、今の私たちがそれをどう果たしていくのかも問われた経緯があります。過去の歴史を正確に知るところを前提として、そのうえで、今、私たちはその過去をどのように受け止めるのか。お考えをお聞かせいただきたいと思ひます。

○赤松 私たちが見直す立場というのは、一つには、過去の歴史の経過があります。私たちが見直すというのは、1945（昭和20）年の敗戦以前、明治から築かれてきた日本近代の政治・社会を構成する法制的な柱として、「大日本帝国憲法」があります。同時に、どのよ

うな人間像を目指していたのかについては、「教育勅語」による臣民像があつて、広く社会で形成されました。また、天皇主権のもとでの臣民という位置づけです。で、国民が等しくその社会を構成する主権者としての位置づけは、敗戦以前にはなかったわけです。

敗戦後は、「日本国憲法」があり、教育の一つの理念としては「教育基本法」があります。旧民法は家父長制のもとの規定であり、家族制度に対する考え方は、改正「民法」によって近代的な家族法が作られました。敗戦後は、言うまでもなく主権は国民にあり、政治への参加についても、男女平等の参政権というものが獲得されたわけです。

私たちは、事後的に、戦前を考えていくという傾向になりがちです。戦争の時代を生きた人たちにとっては、直ちに総力戦の時代に向き合い、自らを含め全体を振り返るには、一定の時間的な経過が必要であつただろうと思ひます。しかし、主権者として、あるいはアジア各地

への戦争の加害者として、総力戦としての戦争を見直すという歩み、すなわち私たちが戦前の歩みをどのような問題意識に立つて認識するのか、どういう事柄・事実が見過ごされてきたのだろうかといった取り組みが進み、1970（昭和45）年前後から、戦争認識や戦争責任を先送りしてきた、戦後の責任が指摘され始めました。

戦後50年にあたる1995（平成7）年、当時の村山富市総理大臣は、通称「村山談話」において、戦前の戦争は、いわゆる東南アジアの植民地に関わる戦争、あるいは侵略の戦争であつたと、戦争の全体としての性格を政府として表明しました。アジアの国々との信頼関係の第一歩を築く、そしてアジアの方々に、数千万に及ぶ方々に、さまざまな加害をしたという事実に向き合つての謝罪表明が、戦後50年の政府の談話であつたと思ひます。

私たちの教団も、戦争に関わる事柄について、敗戦後、戦没者追悼法要を勤め

てきましたが、一步踏み出されたのは、即ちご門主の法統継承のころです。1981（昭和56）年、満州事変の始まりとなる柳条湖事件が起こった日である9月18日に、千鳥ヶ淵墓苑で全戦没者追悼法要が修行され、今年で45回目を迎えます。その後、宗会での平和決議（「わが宗門の平和への強い願いを全国、全世界に徹底しようとする決議」、1991〔平成3〕年）など、宗門に関わるさまざまな関係者のもとで、非戦・平和に関わる宣言が出されてきました。

そして戦後50年にあたり、ご本山の御

影堂で終戦50周年全戦没者総追悼法要が修行されました。1993（平成5）年10月より、鹿児島教区から教区ごとに戦没者の追悼法要が始まり、1年6カ月ほどを経て、1995（平成7）年4月15日に終戦50周年全戦没者総追悼法要が修行されました。法要で、即ちご門主が示しになったご親教の中で、戦争に関わる教団のありよう、教えの受け止め方、責任の所在を明確に示された経緯があります。

ご門主のお言葉を通して、私たちの宗門にはどういった課題があるのか、残さ

れているのかということについて、「戦後問題」検討委員会が設置され、1996（平成8）年にその答申（今日的課題）が8項目にわたって提出されました。私も委員会に参加していました。その後、この答申のもとで、戦争責任に関わる、あるいは未だに明確にしきれていないような課題を、継続して取り組んでいく方向が生まれました。こうした経過も、私たちは再認識が必要であると思います。今年の3月に「平和に関する論点整理」（戦後80年版）が提出されており、詳しくその経過も記述されております（『宗報』

◎ 釈 徹宗

（相愛学園学園長、武蔵野大学総長、浄土真宗本願寺派如来寺住職）



龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程、大阪府立大学大学院人間文化研究科博士課程（比較文化専攻）修了。兵庫大学教授などを経て、現在に至る。博士（学術）。専門は、宗教学、比較宗教思想。第5回涙骨賞優秀賞、第5回河合隼雄学芸賞、第51回仏教伝道教会文化賞・沼田奨励賞を受賞。著書に、『日本宗教のクセ』（内田樹氏との共著、ミシマ社、2023年）、『お経で読む仏教』（NHK出版、2020年）、『歎異抄 救いのことば』（文春新書、2020年）、『落語に花咲く仏教 宗教と芸能は共振する』（朝日選書、2017年）、『日本霊性論』（内田樹氏との共著、NHK出版新書、2014年）、『法然 親鸞 一遍』（新潮新書、2011年）、『仏教入門 親鸞の「迷い」』（梅原猛氏との共著、新潮社、2011年）、『親鸞の思想構造』（法蔵館、2002年）ほか多数。

2025年3月号掲載)。皆さまには、是非お読みいただき、参考にしてくださいればと思います。

○寺本 1981(昭和56)年以来、毎年修行されてきた9月18日の千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要では、日本だけでなく、世界の戦争でお亡くなりになられた、いのちを失われたすべての方々を追悼する営みとして、継続してきています。

では、こうした追悼法要を宗教団体が行うこと自体は、どのような意味合いを持つのでしょうか。

○釈 先人へところを伸ばすというのは、特定の宗教に関わらず、人間の営みとしてすごく重要です。過去の他者に思いをはせない、これから未来にどんなパスを出していくべきなのかということは見えてこない。未来と過去は合わせ鏡ですので、過去の他者へところを伸ばすことは、すなわち、これからどんな社会をつくるのか、どんな方向に歩むのかということとセットになっていると思います。平和の問題でも同じで、過去をき

んと検証しなければ、未来の方向性も見えてこないというのは、間違いないと思うんですね。

教団として平和に取り組むこと

○釈 平和への取り組みは必要だと思います。それは、教団としてです。というのは、宗教教団というのは、すぐく同質性の高い共同体なんですよ。つまり、みんなが同じ方向を向いて歩むという集団ですので、他のコミュニティーよりもずっと同質性が高い。例えば、「民族」なども、同質性が高い集団ですよ。同質性の高い集団というのは、事の是非に関わらず賛同一致するというふうになりがちです。その意味では、しばしばエキセントリックになるし、一気に加速してしまうということが起こります。

宗教教団は、平和への貢献もできる一方、大きな争いも推進してしまう。そういう振り幅があることをしっかり自覚しなければいけないと思います。そのため



に、過去を検証する、そして未来を願う、という合わせ技みたいなものが必要だろうと思うんです。

われわれの教団の過去の過ちも、あるとき急に一線を踏み越えたのではなく、おそらく、そのひずみがどんどん大きくなってきたんだろうと思うんですよ。例えば、真俗二諦の問題でも、ダブルスタンダードで都合よく使ってしまったわけ

です。でも、それもきつと、その経緯があつたんだろうと思います。

じゃあ、どこまで行けば具合が悪いのか、どこまで行けば都合のいい教義の振り回しなのかというのは、ある意味で事後的にしかわからない。経験して、初めて「あつ、あそこは駄目だったな」ということがわかってきます。それこそ、知恵の蓄積です。この場合は世俗の知恵という意味で取っていたいて結構ですが、世俗の知恵の蓄積というものがやっぱり必要です。

私たちは、大戦の経験、そこでつまづいた経験がある。これをきちんと検証し

て、そして未来への方向性を検討し、議論する。この80年も、そのきっかけの一つになればと思います。

○寺本 こういうことを言ってしまったええ、こういう結果に結びついてしまう。こうした歴史的な事柄をきちんと検証していかなければならないということです。ね。

○釈 ここまで行つては駄目だよねということは、なかなか事前にはわからない。おかしい方向に行ってしまった姿を見て初めて、「あつ、駄目なんだ」ということがわかるので、それを蓄積しないといけない。何となく、喉元過ぎれば、

みたいにならないということが大事です。

○寺本 当時としては、ある一面、「どうしようもなく」といわれるような、こうすることがどのような結果をもたらすのかということがわからないままに、その方向に走ってしまったというようなこともあつたのかと思います。

○釈 それは、絶えず、社会問題に取り組んだり向き合ったりしないと見えてこないんです。だから、宗教教団として平和の問題に取り組むべきだというのは、そういう意味もあります。普段から取り組んでいないと、今までの知恵の蓄積を

● 赤松徹眞

(本願寺史料研究所所長)



龍谷大学大学院修了後、龍谷大学文学部講師、助教授、教授を経て、龍谷大学名誉教授。専門は、日本仏教史、真宗史、近代史。著書に、『近代真宗者の「神社問題」論説集成』全9巻（三人社、2019年）、『日本仏教史における神仏習合の周辺』（永田文昌堂、2013年）、『資料 清沢満之』全3巻（共編、同朋舎出版、1991年）、『新佛教』論説集 全4巻（共編、永田文昌堂、1978・1982年）など。論文に、『淺野研眞の思想と社会的実践―仏教理解とその実践としての仏教社会学及び仏教社会事業―』（『仏教史研究』60、2022年）、「大谷光瑞の『満州国』論から『大東亜共栄圏』論―大谷の仏教・真宗論の立場との関係―」（『仏教史研究』58、2020年）など多数。

生かすことなく偏ったりするということが宗教教団には起こる。ですから、そうした自覚に立って、常に平和問題とか社会問題に取り組むという態度。これが宗教教団としては必要だと思います。

戦争の記憶をつなぐ

○寺本 戦前には「帝国憲法」があり、また「教育勅語」で人間像が形成されてきました。そうした中で、国が行うことに關して、ある一種の絶対性、正しさと真理を認めるような条件が備わっていたとの話が、赤松先生からありました。

戦後民主主義において、私たちは自由にもが言える、自由に社会の出来事を検証することができる。そして過去も検証することができる。そうした部分において、私たちが背負う責任は、どのあたりにあるのでしょうか。

○赤松 先ほど寺本先生の言葉に、「どうしようもなく」とありました。「どうしようもなく」というかたちで進んで、

済ませていくことに問題があるように思います。

どういう背景があるのか。その状況はどのようなであったのか。「どうしようもなく」として自らが何を受け入れてしまっているのかを問い直し、問題視する。そのきっかけ、契機がないと、問題の所在が何ひとつ明らかにってこないと思うんですね。

1945（昭和20）年、政治・社会が大きく転換した。そう認識したとしても、戦前の時代を生き、その時代の中でいろんなものを吸収し体得し、内面化した人たちにとっては、直ちにそれまで培ったものを、問い直しすることはたやすいものではないでしょう。しかし、事後的であっても、つらくても、悲しくても、自分の体験なり、そういう時代を見つめ、問い直してみる。そのきっかけは、現実に向き合い、問いを持って歩んでいく人との出会いであったり、戦争の犠牲になった人の声を聞くことであつたりして、私たちの戦争への姿勢が、態度が見

直され、ひいては、戦争に関わる現実を新たにどのように認識していくのかにも関わると思います。

戦後世代は、戦争体験もなく、戦争を知らない、というふうに一括して言われがちです。けれども、私は、1949（昭和24）年の生まれですが、父は1944（昭和19）年9月15日に出征しました。同じ地域から2人が出征し、広島、呉海兵団に入隊しました。父は、その後、たまたま病気を患って帰ってきましたが、もうお一人の方は、そのまま海兵として、アメリカの魚雷を受けて亡くなられ、遺骨もなく紙通知により1945（昭和20）年6月16日がご命日となっています。そういうことを身近に聞き及び、辛苦の生活を強いられた様子を知る世代になります。戦争は、家族や子どもたちに、日常の食べるものや生活のうえで、どれほど苦しい環境を強いるのかということも、子ども頃に見聞きしていました。

軍事的な側面だけの戦争ではなく、総

力戦としての戦争が行われました。その時代を生きた方がさまざまなレベルでの戦争の影響を受けながら生活をされたということ、戦後世代であっても、私の世代は少し見聞きたり、経験として体感したりしています。小学校3年生の頃と記憶していますが、シベリア抑留から帰られた方を歓迎する地域の集まりに児童が学校から集団で参加することがありました。印象深いのは、防寒の分厚い服を着ておられて、帰国を万歳三唱で迎えるというような場でありました。

それぞれの世代で違いますが、戦争を

体験した方は体験した者としての記憶がありましょうし、体験していない人にとっても、事実を写真あるいは映像などを通してリアルに学んでみる、戦跡の場に身を移してみる、過酷な体験をした方と出会って話を聞いてみる、などということが大切かと思っています。「どうしようもなかった」というように言ってしまうと、そういう認識や、自分の身に引き取るものが薄っぺらくなってしまうがちです。悲しみやつらさなどを抱えた家族のありようの現実に向かい合う、ということが大切です。

戦後80年という年月が経過しても、戦争の記憶の一端、戦跡は、私たちの生活する日本の各所にもあると思います。どのように現実に関心を寄せて、目を注いで、そこに何を見いだし、戦争に関わる文脈を見いだしていくのか。それを私たちがどう引き取っていくのか、継承していくのか。このようなことが、非戦・平和に関わる出発点になるのではないかと考えます。軍事的な側面、部隊や軍人などの衝突、争いということだけではなく、広く具体的に戦争と平和を考えてみる必要があると思います。

◎ 寺本 知正

（浄土真宗本願寺派総合研究所副所長）



龍谷大学文学研究科博士後期課程、同志社大学神学研究科博士課程前期課程、大阪大学文学研究科博士課程後期単位取得満期退学。龍谷大学非常勤講師、京都女子大学非常勤講師、岐阜県立看護大学非常勤講師、日本キリスト教協議会（NCC）研究所研究員などを経て、現在に至る。著書に、『お念仏との出会い—ヨーロッパ念仏者のインタビュー—/Encounter with the Nembutsu Way—Interviews to European Nembutsu Friends—』（永田文昌堂、2001年）。論文に、『ヨーロッパの宗教事情と日本人の宗教性』（『宗教研究』第86巻4輯、2013年）、「A Problem of modern Shin Buddhist Studies— from the viewpoint of Barth's criticism of liberal Protestant Theology—」（『The Pure Land』New Series Nos.21、2004年）、「戦後真宗の動向—阿弥陀仏理解と思想史的研究に関して—」（『宗教研究』第75巻4輯、2002年）など。

○寺本 つい最近、ご近所でコロッケ店を営んでおられるご門徒で非常に熱心なおばあさんの一周忌を勤めたときに、先に亡くなられたご主人の話になりました。毎朝店の仕入れ後に必ずお寺に立ち寄られて、朝ご飯を食べて、という方だったんですが、南方の戦地で炊事役の兵士だったそうです。あるとき、別の炊事役の兵士と仕入れに出掛けている間に、帰ってきてみたら部隊全員が死んでいたことがあったそうです。その後、引き揚げられて、ずっと大阪の地で暮らされて、抱えていらしたものは非常に大きかったんだろうなと思いました。

戦場でのこと、軍事的なものだけではなく、戦争の時代には、一種の生々しい記憶があります。近年、本願寺派寺院を対象に戦時被災等に関する「宗門寺院と戦争・平和」調査が行われましたけれども、こうしたところからも、まだまだ戦争の記憶をつないでいかなければならないと思います。

○釈 50回忌のお勤めは、今ではめった

にありません。50年たってお勤めしようという人が、どなたかおられないと成立しません。よくあるのは、わりと早くに親を亡くされた方とか、あるいは長生きされた方が50回忌を勤められるといった場合です。住職をしていても、50回忌の法要はやはり珍しい。年に1、2度あるかないかみたいな感じですよ。

しかし、戦後50年のときは、その年だけ多くの50回忌の法事をしました。だから、相当最後に無理したんだろうなと思うんですよ。戦死者も多く、また大阪でも1945（昭和20）年に大空襲がありましたからね。終盤に大勢の人が亡くなったんだなと感じました。こうした個別のストーリーをちゃんと拾う、耳を傾けるというのは、宗教の領域としてすごく大切なことだろうと思います。

「卵の方に立つ」宗教者

○釈 例えば、経済が悪化すると戦争の可能性が高まるというデータが出ていま

す。そういう意味では、経済支援とか、宗派が推進している子どもの貧困問題に取り組むというのも、もちろん平和活動につながります。

そもそも宗教というのは、大きな構造、例えば国家のような取り組みよりも、まずは目の前で苦しんでいる人とか、弱者、マイノリティーの声を聴くというのは、宗教の領域で最初に取り組むべきところだと思います。

村上春樹さんがイスラエル文学賞をとったときに語った「壁と卵」というスピーチがあります。受賞したときは、ガザ侵攻をしている最中だったので、世界中の非難がイスラエルに集まっていました。村上春樹がイスラエルの文学賞を受賞したので、「まさか受けないだろう」「辞退するだろう」とみんな言っていたのを、受けたんですよ。そうしたら、世界中で不買運動が起こって、「そんなやつだったのか」みたいな感じだったんですが、村上春樹さんは授賞式ちゃんとイスラエルまで行って、受賞した。そ

のときにしたのが「壁と卵」というスピーチです。

強大な壁があつて、もろい卵があつて、ぶつかるとう当然卵が割れる。壁には壁の言い分があるだろうし、卵には卵の言い分があるだろう。自分には、その是非はよく分からないけれども、まずは卵の方に立ちたい。

そのとき、今までほとんどしゃべったことのないお父さんの話をされたんですよ。お父さんは浄土宗のお坊さんで、ここかで法務員をされていたんですね。お寺の住職とかになつたわけじゃなくて。それを、「僕は、父のことはすごく反発していたんだけど、卵の方に立つということをお父さんの背中から学んだ」と言っていました。まずは卵に立つという姿勢というのは、われわれがもし平和活動に取り組むときに、一つ押さえておかなければいけないところじゃないかという気がします。

○寺本 戦争を経験された方。戦後において、さまざまな辛苦を経験された方。

そういう方々の個別のストーリーをよく聴く。そして宗教的な行為を行えるのが私たちの教団です。総長からの「戦後80年にあつた平和を願うメッセージ」にも、つらい経験を語ることができる、それを受け入れることができるのが、私たちの教団なんだということがございました。

「卵の方に立つ」というのは、弱い側に立つというようなことになるのでしょうか。

○釈 そうですね。そのときは、いわゆる強力な軍事大国であるイスラエルとガザとの例えで言ったんですね。ガザなんかは本当に弱々しい立場じゃないですか。村上春樹さんは、とにかく自分は難しいことはよくわからないし、きっとイスラエルにはイスラエルの言い分があるんだらうけども、まず私は卵の立場に立つてものを考えたいというふうに言つた。もう一つは、われわれの中にも壁と卵があると言っていました。

われわれの何とかしたいという思い

は、システムとか、暴力とか、国とか、そういうものでわりと簡単につぶされてしまう。自分の中の大切な卵がつぶれてしまうので、まずは卵に目を向ける。そんなスピーチでした。

(前半ここまで)